

但東町史



## 但東町 町章

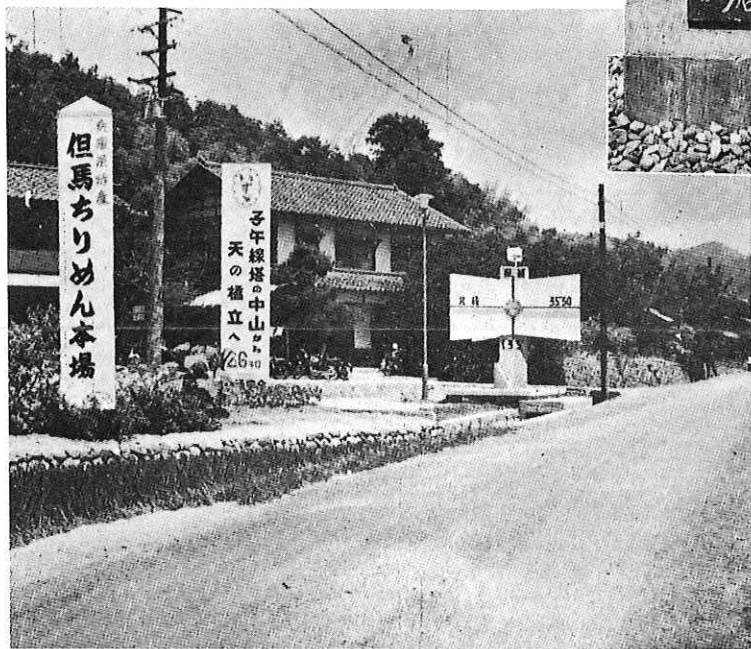


この図案は但東町の「た」を図案化したもので、図形は町の融和を表し、左右に張り出した線は町の躍進を表わしている。

(昭和35年9月制定)



日本標準時「子午線（東経135度線）の塔」現地



(標準時制定75周年—昭和36年7月12日—記念建立)

## 日出神社本殿修復記

着工 昭和四十八年十月

竣工 昭和四十九年九月

総事業費 二千万円

修理指導 文化庁 兵庫県教育委員会

但東町教育委員会

設計監理 財団法人 文化財建造物保存技術協会

施工 重要文化財日出神社本殿保存修理委員会

日出神社は十世紀の初めに勅撰された延喜式に誌され中世には恒良親王にまつわる伝説をもつ古社である。今の本殿が造営された時期は詳らかでないが、建築細部の技法によつて十六世紀初め頃と推考される。本殿は建立以来幾毎かの重修を経て改変もされ、また近年には荒廃が著しく建物は履屋内にあつたが、主要部は建立当初のまま遺存しており、日本建築史上価値あるものとして、昭和四十五年三月重要文化財に指定された。

時に本殿は各部の虫害や腐朽破損で組手等も弛緩しており、今回文化財保護法にもとづく解体修理を施工し同時に綿密な調査結果により、建物は建立当時の旧規に復原し履屋も撤去して室町時代の容姿が再現された。

本殿は三間社流造 こけら葺 庇内には浜床が一面に張られて見世柵造風であり、また身舎正面の柱間が開放であることなどはこの建物特有の形式で、妻組が冢又首であることもこの頃の建築としては稀少である。

記念碑造立 重要文化財日出神社修復奉賛会

【注】 「修復記」の碑文ならびに書は設計監理 持田武夫技師



国重要文化財 日出神社本殿 (畑山)



修復記念碑





藤原期の薬師如来坐像（県指定重要文化財）



昭和46年3月指定 松禅寺佛堂

民俗資料 農村歌舞伎舞台（県指定重要文化財）



安牟加神社境内（855頁参照）

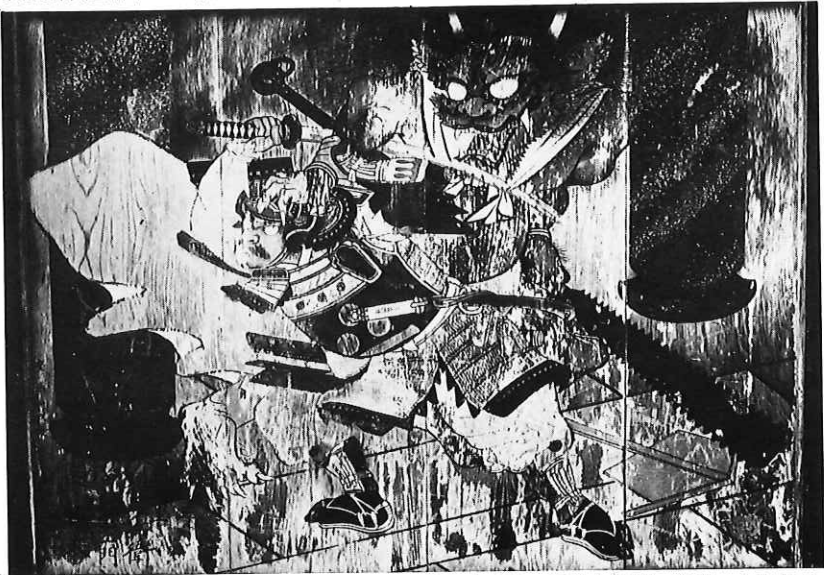


金蔵山金蔵寺の懸佛



加悦町 吉祥寺提供 ( 80 頁参照)

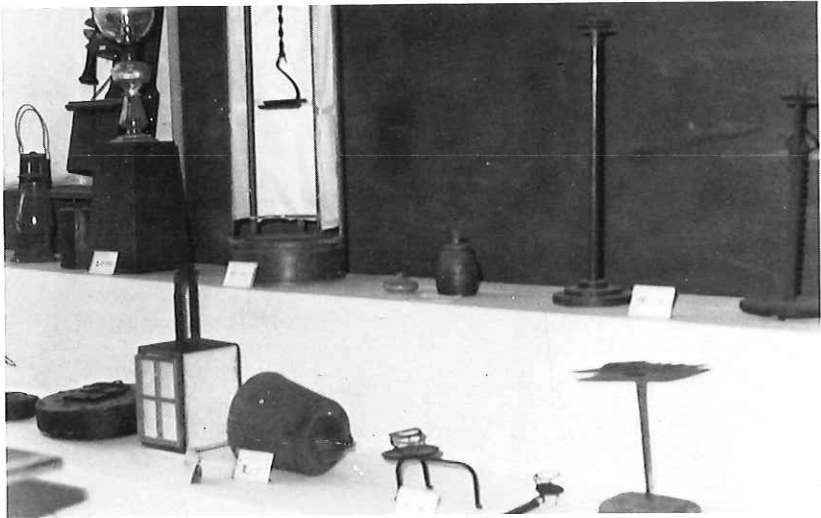
大生部兵主神社へ奉納額絵 (薬王寺)



慶応4年(1868)奉納 大河内 桑垣多兵衛・同勘右衛門・赤花 小西牧太  
源 頼光 大江山鬼退治(932頁参照)



町立・但東町民俗資料館正面（赤花）



館内の1部 灯具



庚申像の1部



赤花字上ノ垣 文化3年(1803)作



東覚寺(畑) 寛政12年(1800)作

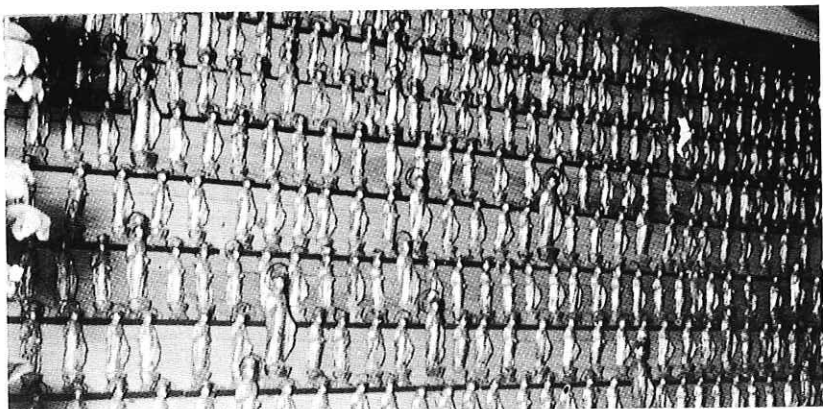


平田字坂本

705頁参照(庚申像三体 神戸市 兵庫文化財写真研究会長 矢野明弘氏提供)







赤穂義士供養「千体仏」

大石良雄の妻りくの祖父石東源五兵衛が義士の霊を弔うべく3,000体の木彫の観音像を作って追善供養したもので内1,000体が蔵雲寺に安置されている。

(付録参照)

文 碑 跡 史

元治甲子七月京師蛤御門ノ戦ニ敗レ長藩士桂小五郎(后木戸孝充ト改ム)幕府新撰組ノ追及ヲ通レ出石ニ落チ行ク途中此ノ関所ヲ通過セントシテ関吏ノ疑フ所トナリ將ニ捕レントセシモ広戸甚助百方弁解危難ヲ免カレタル史跡当時ノ関吏ハ出石藩士長岡市兵衛、高田十郎左衛門関所ニ使用シタル八民家浅田品太郎ノ家屋ナリ

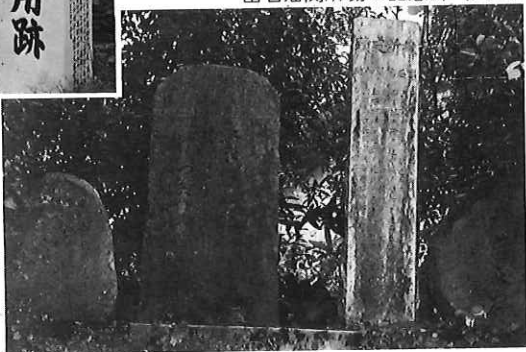
(年表参照)



右から二番目の石碑文字  
昭和六年建立

昭和六年 建立  
右から二番目の石碑文

出石藩関所跡の記念碑(久畑)



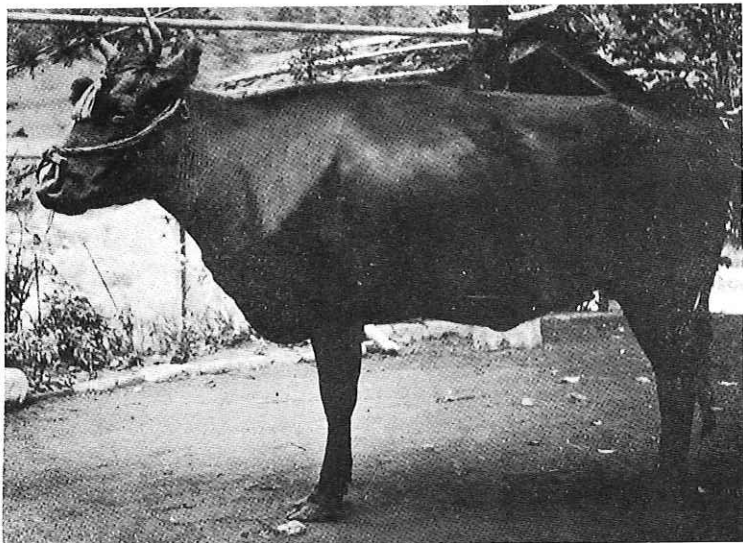


いなぎば蔓牛記念碑（右）  
 碑文は全国和牛登録協会長 羽部義孝  
 （京都大学教授  
 農学博士）



石碑下部の説明文

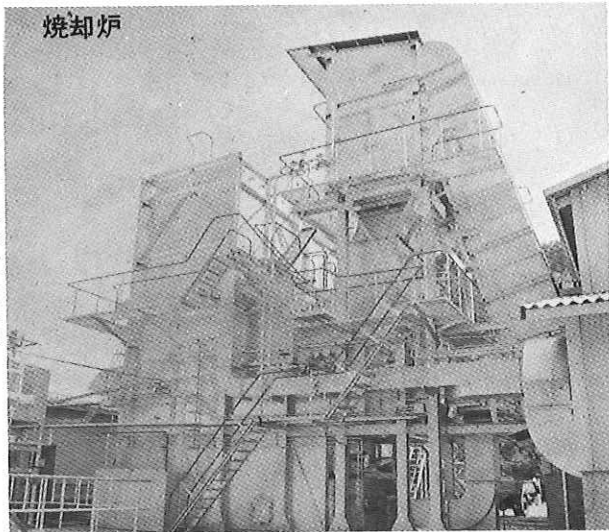
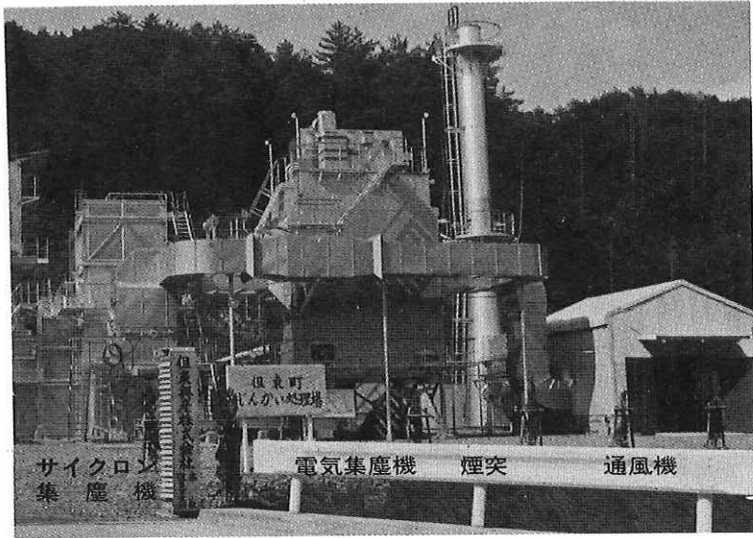
いなぎばつる牛（211頁参照）



（昭和25年撮影 大河内、石坪利平所有）



町と三菱電機株式会社の共同により完成したじんかい処理場



位置  
矢根九一六番地

タクマ製SD型で一日一三トン（二〇時間稼動）の  
焼却能力設備。炉内温度七〇〇℃～九〇〇℃





## 序 文

但東町は昭和三二年九月、旧三村を合併し新らしく町政をしいて、本年九月で満二〇年を迎えることになりました。まさに成年期に達したといえます。この町史はその二〇周年記念事業として出版したものであります。合併して成年期に達したわが町が、今後に残された最も重要な課題は、町民がよく合併の趣旨にしたがつて一致し、先人がこれまで成し遂げてきた行績を受け継いで、さらによりよくわが町の発展を築き上げることであると思えます。この意味で町史を作ることが昭和四七年町政振興審議会から答申され、同年から着手したものです。

しかし、公の文書としての町史に、どのような内容を盛るかは極めてむづかしい問題であり、われわれの知り得る過去から現在へのわが町の歴史を詳しく記録したとしても、二四時間の出来事を洩れなく書いて、洩れなく読むのに二四時間かかるような歴史を書いても仕方がない。この意味で歴史は選択であり、文化の記録であります。われわれの先人が、どうしてこの地を選んで住みついたか、古代からここに住みついた人々は、どのように肩を寄せ合つてこの地域を愛し、ここに住み続けてきたか、町史は依然として今日まで町民が生き続けてきた住民の歴史であり、「町」という生活共同体そのものの文化史であるといえます。既に

立派な村史や町史を出している町村も多いが、私は特に編纂委員の方々にお願ひして、過去から現在までこの町を育ててきた町民と町の歴史をわかり易く書いて頂き、今後の町勢発展のよすがにしたいとその総てをお委せしました。幸い編纂を引受けて頂いた委員の方々は、みな本町で生活され、または現に町民として生活しておられる方々ばかりで、三カ年の長きに亘つて町内外の史料を蒐集され、このような立派な町史に纏め上げて頂きました。しかもどの頁にも町を受し町の発展を祈念される委員の方々の愛情が、じかに感じられることは私の最も嬉しく思う点であります。「カニは甲羅に似せて穴を作る」といわれております。しかしこの町史は全く町民による町の歴史であり、現にこの町に住み、将来もこの町に生きてゆく町民各位はもとより、本町の出身者も、この町に関心をもたれる方々も、是非この町史を読まれて、改めてわが町を知り、この町の今後の発展を見守つて頂きたい。

最後に長期に亘つて町史編纂のためご尽力頂いた前町長田畑憲一氏、総合執筆された宮出秀雄博士はじめ委員七人の各位、とくに繁煩な編集事務を引受けられ、完成に努力されたもと助役山本梅治氏等に対し深く感謝の意を表し、その労をねぎらい序文といたします。

昭和五十一年九月

町制二〇周年記念日に

但東町長

福田芳郎





## 但東町史によせて

本町は兵庫県出石郡の東部に位置し、もとの合橋、高橋、資母の三村が、昭和三十一年に合併し町制をしいた町である。兵庫県の地図をみると、ほぼ梯形をした県の北東部に、京都府側に突出した部分が見られる。この部分が出石郡であり、その東部が本町である。新町制施行に際し、兵庫県の北部即ち但馬の東部にあるので「但東町」と命名されたもので、地理的な位置を明らかにしている。人にも村にも町にもそれぞれ歴史がある。その歴史を明らかにしようというのがこの町史である。この町は東経一三五度の日本標準時、子午線が縦断しており、北流して日本海に注ぐ円山川の支流、出石川の源流にあり、四囲山に囲まれた山村で、分水嶺で京都府と境している。そのため出石川に沿って下る以外はいずれも峠があり、昔から交通の障害となっていた。面積一六一・八平方料、その九二・六％は山林で、田畑面積は七％に満たない。昭和五一年七月末現在人口七、一一三、世帯数は一、七四五で、年々人口は減少していたが、最近漸く安定をとり戻している。それは京都府から伝わった縮緬機業が行われているので、事業所数七〇〇を超え、織機台数は二、二〇〇台に及び、農林業と共に本町の重要産業となっている。

このような地に、いつの日に先人が住み始めたか。上古から中世及び近代に至る間、その先住の町民はどのようにこの町に永住し、生活を立て、今日までの共同生活の基礎を築いてきたか。上述の山陰の但馬東部の山村であるだけに、その歴史は必ずしも明らかでなかった。しかし上古においては出雲族と大和族との交

流の地点にあり、各部落に現存する多くの神社や寺院なども昔の原住町民の共同生活の歴史を示しており、中世における豪族の住居跡や山城なども、この町の古い歴史のあとを示している。本町は満二〇年記念事業としてこれらの歴史を記録し、町史として編纂する計画を樹て、過去三年間史料を蒐集し、この程漸く完成を見たのが本町史である。このような町村史の編纂は、旧村時代にも試みられ、但馬の歴史としては「但馬考」「但馬史」等があり、旧村史としては「資母村誌」等があるが、合併後二〇年を経た今日、統一した町史編纂を記念事業として編纂委員が委嘱され、本町史が完成することとなったのである。町村合併を前後して但馬の各町村でもそれぞれ立派な町村史が完成しつつある。しかし、本町史のように現住の町民、または、町に生活して育った編纂委員の協力によって、文字通り町民の手による町史が完成した例は必ずしも多くない。この意味でこの仕事に当られた編纂委員の各位に町民を代表して深く感謝の意を表したい。

町への愛情と尊敬は過去を知ることによって生れ、将来への希望は、過去から現在への確かな軌跡の上に乗られる。われわれは本町史によって、先住民が何故にこの地を選んで住み、村や町の発展に力を合せてきたか、そのつつましい過去の歴史を知ることによって、今後この町の新しい発展への新しい協力と統一が生れることを確信してやまない。委員の方々の長い苦労と献身によってできたこの町史が、町民の新しい教科書として広く読まれること、本町出身者の方々もこの町史によって故郷を偲ばれ本町の今後の発展のため、何かとご協力賜りたいことをお願いし、いささかご挨拶にかえさせていただきます。

昭和五十一年九月

但東町議会議長

小畑義行



### 編纂委員を代表して

但東町はわがふるさとである。われらはここに生れここに育った。このふるさとの歴史は、ここに生まれ  
てここに育った人々の手によって記述され、ここに住み、ここをふるさととする人々のために語りつがれね  
ばならない。それだけに町史を編むことの責任は重大である。

最近市町村の歴史を編纂して、後世に残そうとする試みが、但馬地方のみならず、全国でも多く行われる  
ようになった。これらの郷土史や、郡史、市町村史にはどれにも一つの型ができていく。

日比谷公園にある東京市政調査会の書庫には、何千冊というこのような市史がある。これらを丹念に読ん  
で、私がかつて「市史の方法論」という論文を『都市問題』に書いたが、これらの書はいずれも郷土の出土品、  
古墳、遺蹟、天然記念物、文化財等が丹念に記録され、郷土の歴史の深さと重みを誇っている。しかし、何  
故に古人がそこに住みついたか。先人がそこでどのようにしてその衣・食・住の資を求め、それらを再生産  
して生きてきたか。どのような生産力の発展がここに住む人の生活を豊かにし、村や町の発展を支えてきた  
かと結びつけ、住民の生活に即して書き綴ったものは案外少い。しかし、町史として最も必要なことは、歴  
史の論理を通して先人の足あとを偲ぶと共に、新しい勇気をもってこの町を愛し、互いにその町民の繁栄と  
町の発展を図るために過去を知ることである。それには経済史的、産業史的考察が中心とならねばならない

といえる。

われわれは町史編纂の仕事を引受けてから、皆で話し合い、既に発掘された出土品や資料をもとにし、既に多くの人々によつて書かれた郷土史に足場を求めながら、このような考え方でこの町史をつくり上げることに努めたつもりである。とくに私は大学の図書館等にある山のような研究書や資料をかなり丹念にあつて、但東町という個性の中にある一般性を確かめたつもりである。しかし、実際にどの程度そのような町史としての特異性を發揮したかは、やはりこれを読んで頂く人々の批判にまたねばならないものが多い。

ともかくもこうして熱心な多くの協力の方々の努力によつてこの町史はでき上つたが、もしその特色があるとすれば①一般の国史、戦史よりも、経済史、産業史的記述に力点をおいたこと。②支配者の歴史でなく町と住民の生活史、社会史に力点をおいたこと。③何よりもここに生まれ育つた人々の手によつて書かれ、編纂されたこと。④町内の新しい史料を發掘し、整理したこと。⑤過去と現在の歴史の軌跡を通し、若干とも将来への展望をも可能とするような歴史の論理を尊重しつつ記述されたこと、等を挙げる事ができるといえる。

この町史の成立経過は「あとがき」にゆずるとして、ともかくも町当局の発意と、多くの人の努力によつてこの町史が完成したことは、二〇周年を迎えた町の事業としても極めて有意義であると共に、この書がふるさとを愛する多くの人々によつて読まれ、批判され、次の新しい歴史に引継がれることを祈念してやまない。編纂者を代表して一言所感をのべ、序文とする。

昭和五一年九月

東海大学経営学部教授  
農学博士

宮田 秀雄

# 『但東町史』目次

序 文

但東町史によせて

編纂委員を代表して

題 字 前 町 長 田 畑 憲 一

見返し(表) 初代資母村長 故 今 井 雨 香  
                  県会議員三選

見返し(裏) 二 紀 会 太 田 垣 恵 一

## 第一章 前 史

むらとくらしの始まり

第一節 人間生活のはじまり

—古の生活共同体—

一、地域と人とくらし

二、生活の共同と共同体

三、分業と協業

第二節 古代のむらの人々の生活……………八

一、古代のわが町とその頃の住民の生活……………八

1、古代人の生活……………八

2、わがまちでの生活のはじまり……………二〇

(1)古墳からみた古代の但東町……………二〇

—わが町の古墳—……………二〇

(2)わが町の古墳……………二四

○合橋地区……………二四

○資母地区……………二四

○高橋地区……………二五

(3)古代住民のとむらいと墓……………二七

(4)古代のくらしと神社……………二八

二、出土品からみた古代のわが町……………二八

1、石器と土器時代……………二三

(1)石 器……………二三

(2)石器と石器時代……………二四

(3)わが町の石器……………二四

— 木村の尖頭器 —

(4) 土器と出土品

イ、縄文土器片と出土品

ロ、出土品

三、古代人の住いと生活

1、昔の住まい

2、古代先住民の食物と生活

3、われらの先祖の衣生活と紡織

4、銅・鉄器時代とわがまち

5、鉄と鉄器の使用

6、上古のわがまちの住いとくらし

四、集落の形成と農耕のはじまり

1、農耕生活のはじまり

2、焼畑・刈生（かりう）

3、縄文農耕

五、古代のわがまちと産業

1、山村の形成

2、古代産業としての石器の生産…………… 四八

3、土器の製作…………… 四九

4、銅と銅鐸の製作…………… 四九

5、鉄と鉄器の使用と製作…………… 五〇

## 第二章 古代のわがまちとくらしの変化

第一節 くにつくりと村づくり…………… 五〇

一、出雲族と古代のわがまち…………… 五〇

二、邪馬台国時代のわがまち…………… 五〇

三、絹と養蚕…………… 五一

第二節 荘園の形成とわがまち…………… 五一

一、荘園（庄園）の形成…………… 五一

二、土地の私有と集積…………… 五二

三、古代の但東町の集落と神社…………… 五二

## 第三章 中世におけるわが町

第一節 中世の佛教とわが町…………… 五七



一、中世における但馬の佛教	七〇
二、佛教と但馬及びわが町の寺	七一
三、山岳佛教と金藏山金藏寺	七七
1、金藏山金藏寺の由緒と遺跡	七八
2、寂室和尚と金藏寺	八三
3、金藏寺領の滅亡とその遺跡	八七
4、奥藤山内の笠堂と観音祭	九一
四、遍歴開山と唐川禪定庵	九二
五、相田の安国寺	九四
六、小坂の乗専寺	九六
第二節 中世農村の変貌と土地譲渡	九八
第三節 但馬守護職と太田文	一〇一
一、鎌倉幕府の成立と但東町	一〇一
二、但馬守護職と太田昌明	一〇四
三、但馬国太田文	一〇八
四、但馬国太田文とわが町	一〇九
五、但馬守護職と恒良親王	一一五

第四節 中世のわが町の産業……………一四〇

一、中世における農業と牛の飼育……………一四〇

二、道路交通の発達と座及び振売り……………一四五

1、中世の道路交通……………一四五

2、中世における座と振売り……………一四六

三、農業と中世の農業技術……………一四九

四、中世の養蚕と絹織物……………一五二

## 第四章 近世における但東町の歴史

第一節 近世初期における農業技術……………一五五

一、農村経済と幕藩体制……………一五五

二、稲作の技術……………一五七

1、種粃の浸漬……………一五七

2、苗代……………一五八

3、本田の耕耘……………一五九

4、田植え……………一六三

5、除草……………一六三

6、収穫・調整	一六四
7、俵装	一六七
三、近世前期の畑作と養蚕	一六七
1、菜種(なたね)	一六九
2、麻・綿	一六九
3、近世前期の養蚕	一七〇
a、催青	一七一
b、掃立	一七一
c、給桑管理	一七一
d、上簇	一七二
e、製糸	一七二
四、近世の交通輸送	一七三
五、街道筋の古碑	一八三
六、但東町旧出石領の村方の状況	一八九
七、藩札	一九七
第二節 近世後期の農業とわが町	一九八
一、近世後期の農業技術の特質	一九八

1、稻作	一九
2、畑作物	二〇
3、蚕桑技術	二〇
(1) 桑と養蚕	二〇
(2) 養蚕技術	二〇
(3) 桑畑課税	二〇
4、畜産と博労	二〇
(1) 博労と牛市	二〇
(2) 和牛と「つる牛」	二〇
(イ)、但馬牛	二〇
(ロ)、いなきば <small>つる</small> 葛牛	二〇
(ハ)、牛の市場	二〇
5、水利と井堰	二〇
第三節 伊能忠敬と但東町	二五
第四節 近世後期の藩政と経済	二五
一、検地帳と村差出帳	二五
1、赤花作り之御水帳	二五

2、宝永三年後村差出帳	二三八
二、わら谷事件とその裁許状	二三三
(1)西野々村訴状	二三三
(2)同	二三五
(3)木村返答書	二三八
(4)木村請取書	二四一
(5)裁許状	二四三
三、文化年間の村の経済と社会	二四五
1、文化十一年(一八一四)の頼母子之帳	二四五
2、遊行上人の通行	二四九
3、遊行様通行控	二五〇
四、天保年間の村方の動き	二五五
1、天保の飢饉とその文書	二五五
2、幕府巡見使とわが村	二六二
(1)天保九年御巡見様御案内之帳	二六四
(2)天保九年御巡見様始末書之帳	二七七
3、触書と村の改規定書	二八五

五、寛政・嘉永・安政の宗門改めと村方議定……………二九三

1、宗門改帳とその十五箇條……………二九三

2、規定、覚、議定……………二九六

(1)安永二年久畑村の覚書……………二九六

(2)寛政一二年坂野村の覚書……………二九九

(3)三領規定……………三〇〇

(4)安政六年（一八五四）中村の宗門改帳……………三〇二

3、五人組帳……………三〇六

4、文久元年儉約之覚書……………三二〇

六、近世後期にみる年貢割付状・免定ならびに訴状・願書・請書……………三四

1、年貢割付状・免定と年貢皆済目録……………三四

(1)宝延二年坂野村御物成之通……………三五

(2)寛政三年木村米銀済目録……………三六

(3)安政五年中山村定午免相之事……………三七

2、訴状・願書・請書……………三九

(1)嘉永六年坂野村口上之覚……………三〇

(2)慶応二年定免村々文書……………三一

第五節 近世後期における地主の形成と土地集積

一、幕末における地主の形成

二、矢根大石家の形成と地代・利潤の集積

三、農業経営と農作業

1、「手作り」の記録

2、農作業の記録

a、田の仕事

b、畑仕事

c、山仕事

四、近世後期の治水・水害対策

五、近世の交通と幕末の旅行記

1、山本弥左衛門の廻国記

2、大石一堂の長崎旅行記

第六節 近世後期の産業

一、奥矢根銀山

二、縮緬機業の移入と副業

1、但東町機業の移入

三四

三四

三六

三九

三九

三四

三四

三四

三五

三四

三八

三八

五〇

五二

五二

五九

五九

## 第五章 現代における旧三村の成立

### 第一節 明治維新と諸企業の抬頭

- 2、藩政下の副業奨励……………三六七
- 三、酒造業の発達と酒造出稼ぎ……………三六八
- 一、明治の生誕……………三七四
- 二、先駆的企業の抬頭……………三七八
- 三、政治行政の変革……………三八六
- 四、豊岡県下の産業の発達……………三九一
- 五、魚市場の設立と但東町……………三九三
- 六、地租改正と公有林野の整理……………三九三
  - 1、地租改正の意義……………三九三
  - 2、地租改正と地券……………三九七
  - 3、山林原野地租の改正と公有林整理……………四〇〇
    - (1)山林の地租改正……………四〇〇
    - (2)官有民有林区分について……………四〇一
- 七、郵便局の設立……………四〇三



1、中山郵便局	四〇三
2、久畑郵便局	四〇四
3、矢根郵便局	四〇六
八、唐川製絲の生誕	四〇七
第二節 町村制の成立と旧三村の発足	四〇八
一、明治初年の町村と部落	四〇八
二、町村制の成立とその経過	四一三
1、町村制村田案の成立	四一四
2、町村法調査委員の案	四一五
3、地方制度編纂委員会の案	四一六
4、モツセ起草の地方行政組織構想	四一八
5、町村制の成立	四二〇
三、町村制下の旧三村の発足	四二〇
1、村行政の発足	四三〇
2、高橋村第一回議会議事録	四三二
3、高橋村の発足とその事務状況	四三四
4、合橋村の事務報告書	四三六

5、高橋村分村問題の経緯	四二九
6、明治二〇年代の村民生活の一面	四三三
7、資母村役場の発足と事務状況	四三五
8、基本財産積立と起債	四四五
9、総代と総代会事務の概要	四四六
10、高橋村県税・商業税等賦課表	四四九
11、合橋村商業税等賦課表	四五九
12、公有林整理のための調査	四六九
13、山村の林野行政	四七〇
14、入会林紛争問題	四七五
<b>第三節 但東町の明治教育史</b>	四七六
一、「学制」発布以前の教育	四七六
二、「学制」発布の頃の教育制度	四七九
1、下等小学教則第一学年第一期第八級	四八二
2、改正教則	四八四
三、但東町各地域における学校教育の発足	四九〇
四、校舎建築及び学区の問題	四九八

五、教育制度及び内容の改変	五〇二
第四節 郡制と出石郡役所の成立	五一
一、郡役所の設置	五一
二、町村組合の設立	五二
三、勸農会の設立	五四
四、道路補修と常入夫の設置	五一
第五節 産業経済の発達	五四
一、農業技術の発達と地主制下の農村	五四
1、銀行会社の設立	五四
2、農業の発達と地主制下の農村	五七
(1) 農業の発達と地主制	五七
(2) 農業技術の発達	五九
二、旧三村における農会の発達	五三
農事奨励の歴史	五三
三、縮緬機業の発達	五四
絹織物と縮緬賃織の展開	五四
四、交通・通信・運輸の変遷	五六

1、旧三村における道路交通の発達	五三六
2、道路交通における峠の克服	五三六
3、交通の発達	五三九
4、鉄道建設と旧三村	五四一
第六節 兵制と在郷軍人会	五五一
第七節 明治時代の農村生活	五六〇
一、その変化	五六〇
二、日用品の価格	五六五
第八節 大正昭和初期の三村	五六九
一、大正時代の農村経済	五六九
1、米価と米騒動	五六九
2、畜産業の動向	五七一
3、養蚕業	五七二
4、大正時代の生活用品等の価格	五七三
二、大正時代の旧三村行政	五七五
1、高橋村の諸動向	五七五
2、大正昭和初期の高橋村	五八一

(1) 大正初期の合橋村の状況…………… 五八一

(2) 合橋村分村問題の経緯…………… 五八二

三、大正期の教育…………… 五八四

1、大正期における日本の教育…………… 五八四

2、大正期における但東町の教育…………… 五八五

3、大正時代の小学生の生活…………… 五九〇

第九節 大正・昭和初期の産業経済…………… 五九二

一、大正初期の養蚕業…………… 五九二

二、但馬縮緬工業組合と但東町機業…………… 五九六

1、縮緬機業の発展…………… 五九六

2、縮緬工業の経営経済…………… 六〇〇

3、大正年間における丹後・但馬の機業の状況…………… 六〇三

三、公有及び部落有林入会林整理事業…………… 六〇六

1、合橋村畑における整理事業…………… 六〇七

2、資母村における林野統一問題…………… 六一一

3、合橋村におけるその後の統一事業の動き…………… 六一〇

4、高橋村における林野統一事業…………… 六一一

四、農業団体の発展…………… 六三三

1、産業組合の動向と旧三村組合の設立…………… 六三三

2、産業組合の信用評定…………… 六三五

五、大正年間の青年の気風…………… 六三八

六、大正、昭和初期の交通…………… 六三三

1、道路改修と陸路交通…………… 六三三

2、出石鉄道と交通…………… 六三四

七、郡役所の廃止と山村経済…………… 六三九

八、大正、昭和初期に使用された農具…………… 六四一

九、大正、昭和初期の生活の一断面…………… 六四六

1、婚 礼…………… 六四六

2、葬 儀…………… 六四八

第一〇節 昭和初期の文化と経済…………… 六五一

一、昭和前期の教育…………… 六五一

1、日本教育界の動向…………… 六五一

2、昭和初期の但東町教育…………… 六五四

二、昭和初期の但東町の機業…………… 六五七

1、機業技術の発展と組合	六五七
2、縮緬工業の発達	六六〇
三、自作農創設維持事業	六六四
四、大地震とわが村の救援活動	六六七
1、北但大震災救援活動	六六九
2、北丹大地震救援活動	六七一
五、旧三村における電灯の導入	六七三
六、室戸台風の大風水害	六八〇
七、山村経済と木炭生産販売	六八五
1、主産地合橋を中心として	六八五
2、出石郡木炭移出問屋組合の結成	六八八
3、戦後の動き	六八九
八、民力涵養と農村経済	六九〇
九、村是の設定	六九二
一〇、但東町民の海外進出	六九四
一一、芸能文化と庶民信仰	六九八
1、太刀ふり	六九八

2、虫生の太鼓おどりとささ囃しの歌	七〇二
3、中藤の太鼓おどりとささ囃し	七〇三
4、相撲おどり	七〇三
5、浦安の舞	七〇五
6、獅子舞い	七〇五
7、庚申講——庚申待ち	七〇五
8、但東町の野仏・石地藏・供養塔	七〇七
9、浄瑠璃と竹本太夫	七一〇
10、力士 早瀬川	七一一
<b>第一二節 戦時経済下の但東町(旧三村)</b>	七二四
一、経済更生運動	七二四
二、戦時経済下の村民の経済と生活	七二六
1、日支事変と農村	七二七
2、太平洋戦争と住民の生活	七二八
三、戦時下における但東町の機業	七二九
1、七・七禁令と縮緬機業	七二九
2、戦時下における織機の供出	七三三



四、戦時下の村行政	七二五
1、一般行政	七二五
2、戦時教育の歩み	七三二
五、昭和一九年の軍隊宿営	七三五
六、きびしさ増す戦時耐乏生活	七三九
1、部落会の組織とその活動	七三九
2、「生活刷新規約」の作成	七四〇
3、最高販売価格の制定	七四〇
4、食糧増産活動・配給活動の増強	七四一
5、米穀管理委員会規程の実施	七四二
6、統制品購入券の発行	七四三
7、軍用飛行機献納金の募集	七四四
七、決戦体制下の旧三村行政	七四六
1、昭和二〇年五月の常会徹底事項	七四六
2、大兵庫開拓団の満州分村	七五一
第二二節 戦後の旧三村行政	七六一
一、終戦から三村合併まで	七六一

1、終戦と三村の変貌	七六一
2、戦後町教育の出発	七六二
二、敗戦と大兵庫開拓団の悲劇	七六五
1、敗戦・終戦の背景	七六五
2、大兵庫開拓団の悲劇	七六五
(1)ソ連参戦と入植地引揚げ交渉	七六七
(2)自決入水の記録	七六七
三、戦病死者と遺族会	七六九
合橋戦歿者	七七五
高橋戦歿者	七八五
資母戦歿者	七九四
四、満州開拓青少年義勇軍の人びと	八〇七
五、戦後の農地改革	八二〇
1、農地改革の意義	八二〇
2、第一次農地改革	八二一
3、第二次農地改革と農地委員の改選	八二二
六、戦後農業協同組合の発展	八二六

## 第六章 但東町の成立とその二〇年史

### 第一節 但東町の成立

#### 一、三村合併と但東町の生誕

##### 1、町村合併促進法と合併論

##### 2、合併経過

##### 二、合併直後の紛争と新町発足

### 第二節 但東町二〇年の歩み

#### 一、西本町長時代

#### 二、永井町長時代

##### 1、主な事業と出来事

##### 2、但東町農協の成立

#### 三、田畑町長時代

1、資母農協の発足と活動

2、高橋農協の発足と活動

3、合橋農協の発足と第一年度事業報告

4、農会——農業会——農協組織の変遷

八二六

八二七

八二七

八一九

八三三

八三三

八三三

八三三

八三三

八三三

八三三

八三九

八三九

八五三

八五三

四、戦後町教育の進展…………… 八六九

1、地域社会の実態に即した教育の推進…………… 八六九

2、生涯教育・社会教育の推進…………… 八七二

3、学校給食・その他…………… 八七四

4、過疎化の進行と学校統合…………… 八七六

五、町内各種団体等の設立史と現状…………… 八七七

1、区長会…………… 八七七

2、商工会…………… 八七九

3、森林組合…………… 八八四

4、消防団の歴史…………… 八八八

5、婦人会の歴史…………… 八九五

6、青年団の歴史…………… 八九九

(1)戦前の青年団…………… 八九九

(2)戦後の青年団…………… 九〇三

7、老人会と子ども会…………… 九〇三

(1)町連合老人会…………… 九〇四

(2)子ども会…………… 九〇六

8、社会福祉協議会	九〇九
9、医師と医療等の状況	九二〇
(1) 医師と助産婦	九二〇
(2) 法定伝染病の防除	九二二
(3) 国民健康保険	九二二
10、文芸団体	九二四
(1) 資母文芸協会史	九二四
(2) 俳句会	九二六
11、体育その他芸能団体	九二九
六、福田町長時代	九三一
むすび	九三七
付録	九三九
一、神社	九三〇
二、寺院	九四二
三、但東町指定文化財	九四七
四、九〇年畧年表	九五二
五、主要文献目録	九六〇

あとがき  
但東町史編纂委員名簿

九六四  
九六六